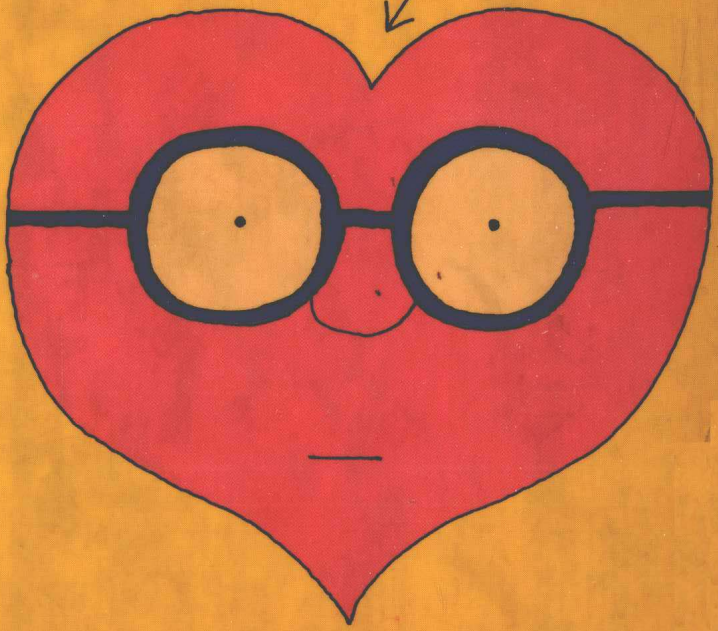
ぐうたら愛情学

遠藤周作



遠藤周作

どうたら愛情学

講談社

ぐうたら愛情学

昭和48年4月16日　第1刷発行
昭和48年5月12日　第2刷発行

著　者　遠藤周作

発行者　野間省一

発行所　株式会社 講談社

東京都文京区音羽2—12—21　郵便番号 112

電話東京(03)945—1111(大代表)　振替東京3930

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　株式会社国宝社

定価 290 円

©遠藤周作　1973

(落丁本・乱丁本はお取り替えいたします)　Printed in Japan

0095-126274-2253 (0)　(文1)

ぐうたら愛情学・目次

第1章　二枚目半愛情論

二枚目半文化論……9
男女分権論……22
当世女子学生物語……34
愛のエスプリ……48

第2章　女性の愛について

妻は夫の踏絵(ふみえ)である……59
「嫁」と「姑」……70
女性に与う愛の十二講……82
1　女の「強さ」とは……82
2　「粧う」とは……89
3　女の「教養」とは……95

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

4 女にとって「友情」とは……101
5 真の「内助」とは……108
6 女と「記憶」……114
7 女の「知的能力」とは……121
8 女の「ウヌボレ」とは……128
9 「偉い女房」とは……135
10 女の「嫉妬」とは……141
11 女の「クソ度胸」とは……148
12 女にとって「ユーモア」とは……152

第3章 夫婦の愛情診断

夫の悩み・夫の不安……161
夫はどう愛情をみせるか……175
夫の嫉妬と妻の嫉妬……189

夫婦喧嘩……204
家庭について……216

第4章

補遺・男の苦しみ、女の哀しみ

人を愛するとは……223
愛の男女不平等について……225
姦通論……237
「テレーズ・デスケールー」という女……255
あとがき……260

ぐうたら愛情学

装幀　和田　誠

第1章　二枚目半愛情論

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

二枚目半文化論

1

二枚目半文化論などと書きますと、どうも大袈裟で照れ臭くなります。しかし他に適当な題名がないので一応この題でおしゃべりをすることにしました。気楽な気持で読んでください。

まず、二枚目半という言葉ですが、これはつい最近、ある週刊雑誌が創りだした言葉です。お読みにならなかった方はキョトンとされるかもしれませんから、簡単に解説しておきましょう。

近頃、映画界では今までのように非のうちどころのない美男スターではなく、何処にでもある顔だちの男優が若い女性の人気をえているでしょう。こう申しあげては失礼だが、たとえば大坂志郎氏だの、小林桂樹氏などがそれです。森繁さんだってある意味でそうだと言えないこ

とはない。外国では、ダニエル・ジェランのような俳優をあげることができます。彼等は決して昔の岡田時彦や上原謙のようにハンサム中のハンサムではない。銀座や新宿を歩けばざらに出あうタイプの顔だちと言ってよいのです。それがかえって現在の若い娘さんから好感をもたれている。つまり二枚目ではなく二枚目半なのです。

その理由はなぜかと言えば幾つでも挙げられるでしょう。寸分スキのない顔だちの青年は女性にとって憧れの対象となっても、なにか縁遠さ、近よりがたさをおぼえさせ、時には警戒心や劣等感を起させる。「素晴らしいハンサムだわ。しかしあたしなんかとてもとても」と思う気の弱いお嬢さんもあれば、「美男子を鼻にかけてイヤらしいったら、ありはしない」と反発する女性もいる。女性だけではない。こうした美男子というのは同性の男性からもヒガまれるだけで必ずしも人生において得をするとは限らないのであります。

ところが二枚目半となるとこんな冷たさ、警戒心を若い女性には与えない。まるでオフィスで一緒に働いている山下クンや田中クン、あるいは家庭にあって小遣ばかり妹にせびる兄貴のような親しみを感じさせるわけだ。「桂樹ちゃん。お茶のみに行かない？」「ヨシきた」そういう気やすさ、親愛感があの二枚目半のスターにはある。「あんな男性なら私の恋人にも見つかるかもしれないわ」。女性には大いに現実感を与え、また我々のような若い男性にも「小林桂

樹がもてるなら俺だって何とかなるかもしれないぞ」という自信を植えつけるのです。

これだけなら問題はない。これだけの話ならば映画雑誌の黄ページのお話だ。だが言うまでもなく映画スターという存在は考えようによっては、たんに銀幕の人気者だけではなく、ある時期時期の女性の趣向や感覚の反映です。戦争直後、三船敏郎のような俳優が若いファンの心をひいたのは、彼が戦後の不安定な世情にもビクともしないたくましい男とうつったからでしょう。今日、二枚目半のスターがもしお嬢さんたちの好感をさそっているとするならば、それ相応の社会的理由がその底にひそんでいるのかも知れない。ぼくが皆さんと一緒に考えたいのはまず、この問題です。

そこでクドいようだが、もう一度、二枚目半の特性を考えてみましょう。二枚目半が今日、好意をもたれるのは第一に彼等が我々男女にとって縁遠い存在ではないからである。それは二枚目という我々凡人のなることのできない高嶺（たかね）の花ではなく、みんなも同じようになれる誰もが恋人にもてる人間だからだ。

第二には、二枚目半には二枚目にどことなく漂うあの偽善的な匂いがない。偽善的というと語弊がありますが、二枚目というのは顔だけではなく煙草の喫（す）い方、洋服の着こなしかた、すべてが完ぺきであり、完ぺきというものは人間にとって偽善的、独善的な匂いを感じさせるも

のです。「私は美男子。みなとちがいます」。極端に言えば二枚目は社会から離れた高い場所に坐っているようだ。彼等はぼくら凡人には憧憬やコンプレックスをもたせますが、同時にある無力感を与えてくるとも言えましょう。

この「縁遠くないこと」「独善的でないこと」「みんなもやれること」こういった一種の現実可能感が二枚目半の魅力です。そして今日、この二枚目半諸氏が映画で活躍しだしたという事実は同時に若い世代が他の領域——たとえば教養や実生活の面でも「みんなにもできる」「縁遠くない」「独善的でない」ものを求めだしているのではないだろうか——こう考えられるわけです。

二つの例をもちだしてみましょう。ぼくはこれで足かけ五年ほどある女子短期大学に週一回でかけているのですが、時々、そこのお嬢さんたちがどんな本、どんな雑誌を読んでいるかたずねる時がある。名前はだしませんが五年前には婦人雑誌ではAというのが一番読まれていたようだ。そのAという雑誌はパリ直輸入のモード、華やかなグラビア、色とりどりに入れて大変うつくしい。それが五年後の今日、同じ質問を女子学生にしてみると思いがけなく人気が落ちている。

「ふしぎだね。昔はA誌が人気があったのだぜ」そうたずねると——

「だってアレ、夢ばかり持たせて、作れないんですもの。モードだって何だって」という返事でした。彼女たちの希望によると、婦人雑誌のモードも夢は持たせてもらわねば困る。しかし役にたつ実現可能な夢でなければ不満だと言うのです。シャンゼリゼを自動車で通りすぎるパリ貴婦人には似合うが、満員電車の東京ではとても着こなせないモードなら意味がない。つまり高嶺の花で憧れだけ持たせる二枚目モードよ、さようならと彼女たちは言うのでした。

彼女たちとの授業でも、この傾向は少しずつ現われてきた。ある日、ぼくはアンドレ・ジイドの『窄き門』を彼女たちに読んでもらい、その感想を出させたことがある。御承知のように、この本は一見アリサとジェロームのこの世ならぬ恋愛を描いた作品で昔の娘さんなら泪ながさんばかりに感激、陶酔した小説。これが今日の若いお嬢さんには思いがけなく人気がなかった。彼女たちは本能的にいわゆる純愛のもつ偽善性をかぎつけたのであります。「ジェロームという青年は女々しいからキラい。アリサだって普通の女じゃないわ」。そういう意味の率直な批判を書いた答案が幾つもあった。勿論こうした二つの例だけから新しい世代の趣味や傾向に判断を与えることは危険でしょう。しかしぼくはこの些細な経験の中にも「二枚目」ではなく「二枚目半」スターを応援する彼女たちの生活感覚がひそんでいるような気がする。現実から浮き上ったもの、独善的なもの、とりすましたものに対する嫌悪がそれです。やすやすと

この生活感覚がいいとか悪いとか言うのは差し控えたい。問題は彼女たちの気持がそうなった以上、その感覚から我々も良い面を学ぶことができないでしょうか。

2

もし彼女たちの感覚を更に発展させれば、二枚目文化は当然馬鹿にされるでしょう。二枚目文化とはおかしな言い方ですが、さきほどの分類にしたがって二枚目と二枚目半とを対立させますと、文化の中にも二枚目文化と二枚目半文化があるように思われる。更につけ加えるならば三枚目文化も考えられないことはありません。

それでは二枚目文化とはいかなるものでしょうか。面白いことには、明治以後、戦前の日本人はこの二枚目文化の影響をうけ、しかも無意識にそれを尊敬していたことです。二枚目文化は見かたによると近代日本文明の歪みをそのまま象徴しているように思われます。

二枚目文化の第一の性格はその特典が二枚目にしか与えられないという点です。こう言えば皆さんは「ははあ、昔のように王侯、貴族だけが味わうことができても一般庶民には手の届かぬ文化のことだろう」とお考えになるでしょう。フランスならばあのフランス革命前まで――つまり芸術も、豊かな生活も、上層階級だけに楽しめ、悲惨な生活と重税に苦しむ一般民衆に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo